

殿小だより



「本物に触れる 能の世界」ふるさとを誇りに思う

木々の若葉がみずみずしく、日差しも強く感じられる季節となりました。熱中症予防対策も行いながら、教育活動を進めています。

さて、6月2日(水)に「本物に触れる 能の世界」と題して、鑑賞会を開催しましたところ、保護者の皆様、地域の皆様にお越しいただき、大変ありがとうございました。用意させていただいた100席もほぼ満席となり、地域の方の熱い思いに触れ、胸がいっぱいになりました。

この鑑賞会は、これまで、「世木の伝統を守る会」の皆様をはじめ、地域の方が大切に守ってこられた梅若家とのつながりの上で、現お家元梅若実玄祥様が、「ぜひ梅若家ゆかりの地である殿田の子ども達のために」と、梅若会の全面的な協力の上で実現したものです。

楽器の体験や、装束とお面を付けて天女に変身していく過程を見せていただくなど、子ども達にとって難しいと思われる「能」を少しでもわかりやすく、楽しく学べるようにと様々な工夫をしていただきました。最後にお囃子や謡に合わせて「羽衣」を演じていただき、あっという間の2時間でした。

最後にお礼の言葉として4・5・6年による「鶴亀」を心を込めて謡い、梅若長左衛門様をはじめ会場の皆様から大きな拍手をいただきました。1・2・3年生の時に自分達が体験した「鶴亀」の謡と舞を3年ぶりに思い出しながら、短時間で練習した子ども達の発表を梅若会の皆様は、何より喜んでおられました。公演後、出演された方から、「今日の中で一番は、子ども達の発表だったね」というありがたい言葉もいただきました。脈々と受け継がれてきた世界に誇るべき日本の伝統文化「能」について学び、子ども達が大切にしてくれている姿に感動して下さったのだと思います。

本校では、ふるさと学習や地域道徳を通して、「ふるさと日吉を愛し、誇りに思う心」を育むことをめざしています。今回の鑑賞会で貴重な体験をした子ども達の感想の一部を紹介します。

○天女の役をしていた方は、動きがとても上手でした。お手伝いの方も歌っている人もがんばっていて、とてもすごかったです。私も大人になったら、能の役をしたいです。能の踊りを見て、興味がとてもわいてきました。

○お囃子方の人たちがいろんなかけ声をしていてとても迫力があってすごかったです。

梅若会の皆様、お囃子方の皆様、地域の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

これからも様々な体験や人とのつながりを通して、子ども達の豊かな心を育てていきたいと思っております。

引き続き、地域の皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

多くのことを学んだ修学旅行

5月20日から1泊2日で奈良・伊勢方面に修学旅行に出かけました。全員揃ってすべての行程を予定通り終えることができました。ありがとうございました。

出発直後から、バスの中ではレクレーションが始まり、いろんなクイズで盛り上がりました。奈良では、ガイドさんに案内していただき、東大寺を中心に鹿のことまで詳しくお話いただきました。その時の、子ども達の聞く姿勢の熱心さに感心しました。自分達の事前学習での知識と結びつけながら積極的に質問する子ども達に、ガイドさんもどんどんお話をしてくださり、時間が気になるほどでした。

伊勢シーパラダイスでは、アシカショーやイルカとのキャッチボール、セイウチのお散歩など、海の生き物とふれあいました。二見ヶ浦では、海岸で貝殻探しや砂浜を走り回るなどし、海を楽しみました。

夜は、7人が部屋に集まり、トランプやUNOを楽しみました。少人数であるがゆえのお楽しみタイムを過ごすことができました。また、夜のサプライズであったおうちの方からの手紙をうれしそうに読んでいる子どもからの「家に帰りたくなかったけど、明日も楽しみだからなあ。」という声に、おうちの方の愛情を実感している様子が感じられました。

2日目の志摩スペイン村は、あいにくの天気でしたが、「雨二モマケズ」の精神で、乗り物に乗る気満々。しかし途中で、グループの中で乗りたい乗り物が人によって違い、困ったことに。どのように解決するのか、遠くで見守る引率者。ようやく話がついたのか、新しいグループになってそれぞれの目的地に向かって走って行きました。お互いの気持ちを大切に、折り合いを付けながら楽しんだ子ども達。ここでも、大切なことを学びました。そのうちに、子ども達の勢いに雨雲が負けたのか、たいした雨にならず、満足した子ども達でした。

仲間とともに過ごした2日間、多くのことを学んだ子ども達。殿田小学校児童として行く先々で礼儀正しい行動ができた子ども達。成長した7人の姿を見ることができました。これから、リーダーとして頑張ってくれることを期待しています。

修学旅行の楽しみの一つ、食事の時間でのことです。食べきれないほどの料理であったため、「無理して食べなくていいよ。残してもいいよ。」という言葉がけに対し、ある児童が「大丈夫です。折角作ってくださったのだから食べたいんです。」と言って、完食しました。その姿に、おうちでの教えとそれを大事にしている子どもの素晴らしさに感心するとともに、軽率な言葉を言ってしまった私を恥ずかしく思いました。

